

## 中世文学における異界描写の諸相\*

——運命の住処の場合——

轟 義 昭

古典文芸を通してわかるように、古代ローマの Fortuna は神として崇められて神性を保持していた。この事実を解説するために、2, 3 の用例をあげれば事足りよう。

- (1) discite nunc, quare *Fortunae tura Virili*  
detis eo, calida qui locus umet aqua.  
accipit ille locus posito velamine cunctas  
et vitium nudi corporis omne videt;  
ut tegat hoc celetque viros, *Fortuna Virilis*  
praestat et hoc parvo ture rogata facit. (Ovid, *Fasti*, IV. 145-150)

- (1)' 湯気立つ場所で Fortuna Virilis に何故香をたくかを今や記憶にとめて下さい。女性達はその場所に入ると、衣服を脱ぎます。だから身体にある傷・しみは一目瞭然です。Fortuna Virilis はそれを香によって男性の目から隠してくれます。

- (2) qui dicet “quondam sacrata est colle Quirini  
hac *Fortuna die Publica*,” verus erit. (Ovid, *Fasti*, IV. 375-376)

- (2)' かつてこの日, Publica Fortuna の神殿がクウィリナルの丘に献堂されたと述べる人は真実を語ることでしょう。

(1)(2) ともオウィディウスの『行事暦』からの引用であり、前者は4月1日に下層階級の女性たちが男性の大衆浴場に入浴して Fortuna Virilis (男性の守護神としての運命) を崇拝し

\* 本稿は、日本英文学会第43回九州支部大会の“シンポジウム”(1990年10月28日、於佐賀女子短期大学)の部門において口頭発表した原稿に基づいている。筆者の論点は、イギリス文学の範囲を越えているので、“シンポジウム”のテーマ「中世イギリス文学における異界描写の諸相」からイギリスを省いたものを本稿の演題にしている。

1 Fortunaの神性保持の実態を詳細に知りたい人は、次の論文を参照して下さい。

W. H. Roscher, *Ausführliches Lexikon der Griechischen und Römischen Mythologie* (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1886-1890), cols. 1503-1558.

J. B. Carter, “The Cognomina of the Goddess ‘Fortuna’,” *T. A. P. A.* XXXI (1901), 60-68.

ていた事実を示している。後者は4月5日に Publica Fortuna (公共の運命) の神殿がクウィリナルの丘に献堂された事実を示している。

また、観光でローマに行った知人の話によると、今日でもそこには“Fortuna Virile”の神殿が完全な形で保存されているとのことである(図1を参照)<sup>2</sup>。この事実は Fortune が本当に神として崇められていたことを我々に納得させてくれる。

だが、時が立つにつれて Fortune は次第に神性を失い、中世文学では虚構的存在とみなされるようになる。このことは Jerold C. Frakes と H. R. Patch が Fortune の解説に用いる「詩的趣向」(‘poetic device’)「杳<sup>よう</sup>としてわからぬ原因によって生じる出来事の隠喩<sup>いんゆ</sup>」(‘metaphor for the event brought about by obscure cause’)「詩的虚構」(‘poetic fiction’)の語句によって容易に推測できよう。

(3) By the beginning of the sixth century, the anti-Fortuna campaign seems to have won on all fronts except that of poetic usage and perhaps folk beliefs. As a goddess, Fortuna was dead, conquered by Stoicism and Christianity; as a poetic device and a metaphor for the event brought about by obscure cause, she had survived and so permeated the consciousness of late antique culture that her symbols and her capricious character were commonplaces, even clichée of literary and probably even non-literary usage.<sup>3</sup>

(4) That he (= Boccaccio) knew Dante’s account is, of course, perfectly certain; and his own comment on the passage on the *Inferno*, besides showing this, also gives us his real opinion on the subject; for here he regards Fortuna as a poetic fiction.<sup>4</sup>

Fortune が「詩的なもの」に変遷して象徴的になれば、当然、運命の住処の描写もそのようになる。ここでは中世の英詩人 John Lydgate の作品と数枚の細密画を取り上げて、運命の住処の異界的特徴の解説を試みる。

1. まず、『ロンドンでの仮装』(*A Mumming at London*)<sup>5</sup>の中に記述される運命の住処の特

2 図1は黒瀬(西南学院大学大学院指導教授)ゼミの先輩である迫和子さんが、ローマに観光旅行された時に、撮影された写真である。これは、紀元前3世紀末に建てられた“Tempio della Fortuna Virile”で、872年にキリスト教会に転用された為に、保存状態が良く、完全な形で残る古代神殿とのことである。

3 Jerold C. Frakes, *The Fate of Fortune in the Early Middle Ages: The Boethian Tradition* (Leiden: E.J. Brill, 1988), p. 29.

4 H. R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature* (1927; rpt. New York: Octagon Books, 1974), p. 22.

5 Henry Noble MacCracken (ed.), *The Minor Poems of John Lydgate Part II* (EETS, OS 192), pp. 682-685.

徴を分析しよう。この運命の住処はリドゲイトの独創ではなく、アラヌス・ド・リール作『アンティクラウディアヌス』の描写を「正確に」<sup>6</sup>受け継いだ『薔薇物語』(5921行目以下と6813行目以下)に基づいている(9-10)。彼女の館は海中の孤島にある。その島は不毛の断崖と小山からなる(11-15)。暫くの間、色鮮やかでみずみずしい花々が咲き、樹木が実を結んで成育し、小鳥が楽しげに和音を奏でている(16-23)。西風が穏やかで心地よい息吹をよせ、空は晴れわたり、季節は温暖である(24-27)。だが、この素晴らしい場所に、突然、波が打ち寄せて全てを破壊し尽くす。みずみずしい花々は茎で萎れ、美を失う。小鳥はさえずりをやめ、樹木の枝からは緑が奪われる(28-37)。運命の館の一方は金・銀・宝石から成る豪華な宮殿であるが、他方は醜く荒廃し、今にも崩れ落ちそうな土牢から成る(38-48)。館の地下室には、一方が砂糖や甘い薬味入りで甘く、他方が苦い味のする二つの酒樽がある(83-88)。

この描写には運命の住処を支える数種の寓意的素材がある。海・島・断崖・山は運命の館への到達を難しくする要素であり、幸運の得難さを象徴している。花々・樹木・小鳥による情景描写、館の構造、二つの酒樽は対照的に用いられ、運命の幸・不幸の二面性と不安定を効果的に象徴している。

＜異界＞の観点から考察すると、<sup>7</sup>(1) 島・山は＜異界＞の地形的要素、(2) 海・断崖は＜異界＞への旅の障害的要素、(3) 花々・樹木・小鳥・西風は＜異界＞の園の要素、(4) 金・銀・宝石は＜異界＞の建物の要素である。これらの要素と＜異界＞描写に関連する要素には類似性が見られるので、運命の住処にも楽園の雰囲気は漂っている。しかしながら、運命の住処が天上の楽園、言わば“paradise”にあるわけではない。『薔薇物語』の中で明確に記述されている。

(5) You are making a goddess of Fortune and elevating her to heavens. You should not do so, since *it is neither right nor reasonable that she have her dwelling in paradise*. She is not so very fortunate; instead, she has a very perilous house.<sup>8</sup>

2. 『王侯の没落』(Fall of Princes) の中でも運命の館は描写される。

(6) Sumtyme he sat hih on Fortunys wheel,  
Of prosperite with bemys cleer shynyng,  
Whos temple is maad of glas & nat off steel;  
Hir cristal yys vnwarli dissoluyng,

6 『異界：中世ヨーロッパの夢と幻想』、ハワード・ロリン・パッチ原作、黒瀬保他訳(三省堂、1983)、p. 231.

7 前掲、p. 356-360.

8 Charles Dahlberg (trans.), *The Romance of the Rose by Guillaume de Lorris and Jean de Meun* (Princeton University Press, 1971), p. 118.

Thouh it be fressh outward in shewyng,  
Vnseur to stonde on, & brotil for tabide,  
Who trusteth most, likli is to slide.

(*Fall of Princes*, IV. 1051-1057)

運命の館は“temple”(神殿・寺院)という語で表現されている。“temple”と言えは、例えば

(7) Nec te paretereo, populi Fortuna potentis

Publica, cui *templum* luce sequente datum est. (Ovid, *Fasti*, V. 729-30)

(7)' 力強い大衆の保護者 Fortuna Publica よ、私は汝を無視したりしません。明日汝の神殿が献堂されるのだから。

(8) Aurea Fortuna Reduci si *templa* priores

ob reditum vovere ducum,... (Claudian, *Panegyricus*, XXVIII. 1-2)

(8)' もし祖先が將軍らの帰還を祝して Fortuna Redux (帰還の安全を司る運命) に黄金の神殿を献納していたならば、...

の用例のように古代ローマの Fortuna を崇めた異教神の神殿を直ちに思い起こせよう。だが、上記の神殿は実在のものではない。鋼鉄(“steel”)ではなく硝子(“glas”)製であり、土台は突然溶けてしまう透明な氷(“cristal yys”)である。運命信仰の問題<sup>9</sup>に焦点をあててこれを考察すると複雑化するので、ここでは館を構成する硝子・氷の寓意素材が<異界>の要素であり<sup>10</sup>、もろさ・すべりやすさを象徴しているという指摘に止める。

3. 写本中の細密画は、見る人にその美しさを印象づけるだけではない。時折画家の独創性が加味されて本文の意義から掛け離れる場合もあるが、本文の視覚解説となり、その理解を助ける役割をもっている。<sup>11</sup>本論においても文字による記述に頼るだけでなく、数枚の細密画を用いて解説すれば、運命の住処の異界の特徴を一段と明確に理解してもらえと思う。図2を御覧下さい。これは Cambridge, Fitzwilliam MS. 169, folio 32<sup>12</sup>で、『薔薇物語』写本の図像である。円状になっているのが海で、断崖絶壁の岩山を取り囲んでいる。右側の岩は氷塊から成る。頂上には2つの館がある。右側の黄金の館は左側の土製の館に比べて傾斜しており、氷

9 Cf. Tamotsu Kurose, *Goddess Fortune in John Lydgate's Works* (Tokyo: Sanseido, 1980), p. 139.

10 『異界：中世ヨーロッパの夢と幻想』, p. 359. 氷については p. 212, 232 を参照せよ。

11 Cf. Lesley Lawton, “The Illustration of Late Medieval Secular Texts, with Special Reference to Lydgate's ‘Troy Book’,” in *Manuscripts and Readers in Fifteenth-Century England: The Literary Implications of Manuscript Study* (D. S. Brewer, 1981), pp. 42-43.

12 Cf. Tamotsu Kurose, *Miniatures of Goddess Fortune in Mediaeval Manuscripts* (Tokyo: Sanseido, 1977), Plate 21.

塊から転落しそうな状態に描かれている。運命のはかなさを象徴しているようである。図3を御覧下さい。これは Oxford, Bodleian MS. Douce 371, folio 40<sup>13</sup>で、『薔薇物語』写本の図像である。波立つ海中に岩壁の島があり、その真中に運命の館が立っている。右半分は豪華な宮殿から成り、左半分はむさい藁ぶき小屋から成る。宮殿の側において運命の女神が外輪に人像を配した車輪を回転させている。絵の左右には樹木の育つ岩山がある。図2と図3は異界的特徴を示す海・島・岩壁の寓意素材と運命の二面性を象徴する構造から成る館を中心に描かれた細密画と言えるだろう。運命の住処のある島の内部を見事に描写した細密画が図4である。これは Valencia MS. 387, folio 42vo<sup>14</sup>で、『薔薇物語』写本の図像である。運命の館は左半分が立派な宮殿で、右半分が汚い掘っ建て小屋から成る。右半分は少し傾いている。その館の中では、目隠しされた運命の女神が翼の付いた携帯用の車輪を手にとって、三つの異なる姿勢を取っている——宮殿内では直立し、館の中央でつまずき、汚い小屋の中では座っている。幸から不幸への変化を示す運命の女神の一連の動作は運命の不安定の象徴のようである。左側には樹木が生い茂っているが、右側には木々が不毛の岩にまばらにしか生えておらず荒涼としている。その枝には不吉を知らせる梟が数羽止まっている。館の周りに二つの川が流れている——左側は澄んだ水であるが、右側は黒ずんでいる。前者では幸運を手にした者達が心地よく泳ぎ、後者では不運な者達が水の中でのたうっている。川の中央にいる二人の人物に注目して下さい。左側の人物は頭が黒ずんだ流れに触れて気分を害し、後戻りしようとしているようである。一方、右側の人物は全力を尽くして泳ぎ、澄んだ水に入ろうとしている。二つの川に関する寓意素材は、『ロンドンでの仮装』において見出せなかったが、運命の二面性・幸運の得難さ等を象徴し、＜異界＞の一要素である。<sup>15</sup>更に、絵の前面の左側には翼のある馬に跨るキューピッド、右側には鋭い剣を手にした人物がいる。これらは『薔薇物語』に記述された運命の住処には存在せず、画家の独創であり、住処の異界的特徴とは何ら関係はない。

『薔薇物語』の写本以外にも運命の館を描写した細密画がある。1989年と1990年の夏、運命の女神に関する細密画リスト<sup>16</sup>を作成するためにロンドン大学内にある Warburg Institute に行き、調査・収集を試みた結果、次のような数枚の絵を見出しました。図5は Paris, Bibliothèque Nationale MS. Fr. 603, folio 91<sup>17</sup>、図6は München, Bayerische Staatsbibliothek MS. Codex gallicus II, folio 13<sup>18</sup>で、双方ともクリスティーヌ・ド・ピザンの『運命の変転の書』

13 Cf. *Ibid.*, Plate 20; H. R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*, Plate 7; 黒瀬保『運命の女神：中世及びエリザベス朝文芸におけるその寓意研究』（南雲堂、1970年）、第二十三図。

14 Cf. John V. Fleming, *The Roman de la Rose: A Study in Allegory and Iconography* (Princeton University Press, 1969), Fig. 31; Millard Meiss, *French Painting in the Time of Jean de Berry: The Limbourgs and Their Contemporaries* (London: Thames & Hudson Ltd., 1974), Fig. 55.

15 『異界：中世ヨーロッパの夢と幻想』, p. 358.

16 Yoshiaki Todoroki, "A List of Miniatures of Goddess Fortune in Mediaeval Manuscripts" 『鹿児島県立短期大学紀要』第41号（1990）、71-114.

17 Cf. Lucie Schaefer, "Die Illustrationen zu den Handschriften der Christine de Pizan," *Sonderdruck aus dem Marburger Jahrbuch für Kunstwissenschaft* X (1937), 119-208, Abb. 151; Millard Meiss, Fig. 15.

18 Cf. Lucie Schaefer, Abb. 160; Millard Meiss, Fig. 16.

(*le Livre de la Mutacion de Fortune*)に描かれた細密画である。前者では海上に浮かぶ広い砂利道を4本の鎖が支えている。その上に四角い運命の宮殿がある。「富」(Richesse)がその入口に立ち、Fortuneの兄弟のEurと一緒に小舟でやって来た人々を迎え入れている。船は<異界>への旅の方法である。<sup>19</sup>後者では波立つ海上に高く聳える氷の岩山の頂上に四角い運命の宮殿があり、それを4本の鎖が支えている。Richesseが入口の前にある椅子に座り、運命の兄弟のEurと一緒に新来者を待っている。Fortuneも新来者を歓迎するために右側の入口に立っている。人物構成は別にして、図5と図6の運命の宮殿の寓意素材は作品中の1461行目から1470行目の記述<sup>20</sup>に基づいている。

- |                                     |                   |
|-------------------------------------|-------------------|
| (9) Il a un lieu dessus la mer,     | ——海上に             |
| Que l'en seult Grant Peril nommer : |                   |
| Une haulte roche neijve             | ——海に覆われた高い岩       |
| Y a merveilleuse et soubtive,       |                   |
| Dessus un grant chemin ferré        | ——広い砂利道の上に        |
| Là siet un hault chastel querré     | ——四角い高い城(宮殿)がある   |
| Assis trop merveilleusement,        |                   |
| Ce semble droit enchantement,       |                   |
| Car IIII. chayennes soustinnent     | ——4本の鎖がその場所を支えている |
| Le lieu,...                         |                   |

この引用文が示すように、細密画家が同一者であろうとなかろうと、図5では1465行目の「広い砂利道」、図6では1463行目の「雪に覆われた高い岩」が寓意素材として選択され、これが2枚の細密画の相違となっている。図7は Paris, Bibliothèque Nationale MS. Fr. 12559, folio 118vo<sup>21</sup>で、サルッソ侯爵トマの『遍歴の騎士』(*Chevalier errant*) 写本の図像である。H. R. Patchと Millard Meissの解説によると、運命の館は全世界を見渡せる最も高い岩の上にある。

- (10) Thomas, Marquis of Saluzzo, in his *Chevalier Errant* (a document of the fourteenth or early fifteenth century), develops the figure of the mountain still further. The dwelling of Fortune is on the highest rock that the eye has ever seen.<sup>22</sup>

19 『異界：中世ヨーロッパの夢と幻想』, pp. 356-357.

20 Christine de Pisan, *La Livre de la Mutacion de Fortune* (SATF, 1959). 引用文の大意は次のようになる。「海上に／大危険という名の場所があります。／雪に覆われた高い岩は／素晴らしく立派です。／広い砂利道の上に／そこに四角い高い宮殿(城)が／余りにも見事に建っています。／これは本当に魅力的です。／というのは、4本の鎖がその場所を支えているからです。」

21 Cf. Millard Meiss, Fig. 49.

22 H. R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*, p. 134.

- (11) In the *Chevalier errant*, illuminated ca. 1404, Thomas de Saluces increased the elevation of the dwelling to a height from which the entire world is visible.<sup>23</sup>

宮殿（城）の最上階では赤い翼をもつ運命の女神が冠を被り、<sup>しやく</sup>笏を手にし、3頭のライオンの上に座って権威を示している。宮殿の真中には最上階に通じる階段があり、その両側には数名の教皇や王侯が腰をおろしている。城壁の内外には多くの者が集まり、運命の愛顧を待っているようである。但し、城外にいる者達は城門が閉ざされているために城内に入ることさえできないでいる。これらの人物は運命の女神を“mistress”とし、奴隸・召使として仕えている、あるいは仕えようとしている者達を示している。<sup>24</sup>宮殿の両側には運命の女神の気紛れによって高みから投げ落とされて転落している者達がいる。彼等を地上で剣や斧を手にした者が突き刺し、ばらばらに切り裂いている。この細密画が本文に忠実に描かれているのか、あるいは画家の独創によるのかは筆者にはわからない。いずれにせよ、運命の住処が岩山・宮殿の寓意素材から成り、異界の特徴をもつことだけは、一葉を用いて大きく描かれたこの細密画によって、明確に理解できる。

**結語** 以上、リドゲイトの作品と数枚の細密画を利用して運命の住処の異界の特徴を考察してきた。論点をまとめると次のとおりである。(1) 運命の女神が神性を失い、寓意という「色あせた宗教」<sup>25</sup>の中で虚構的存在になると、運命の住処も＜異界＞の範疇で考えられ、海上・島・岩山・宮殿・樹木・花々・二つの川・二つの酒樽などの象徴性を帯びた寓意素材で構成されるようになる。(2) 運命の館は、図2, 3, 4のように、立派な部分と粗末な部分とに分かれている場合もあるし、図5, 6, 7のように、素晴らしい宮殿（城）だけから成る場合もある。(3) 運命の住処は「海に浮かぶ島にある」と記述されるように、地上の何処かに位置するような設定ではあるが、幾ら困難・危険を冒して旅をしようとも実際に行ける場所ではない。あくまでも寓意の世界という枠組みでのことである。

(平成3年9月14日受理)

23 Millard Meiss, p. 16.

24 Cf. Boethius, *The Consolation of Philosophy* (Loeb Classical Library), II. pr. 1 (p. 179): “You have given yourself over to fortune’s rule: you must accommodate yourself to your *mistress’s* ways.”

25 H.R. Patch, “The Tradition of the Goddess Fortuna in Roman Literature and in the Transitional Period.” *Smith College Studies in Modern Languages* Vol. III, No. 3 (1922), p. 131.

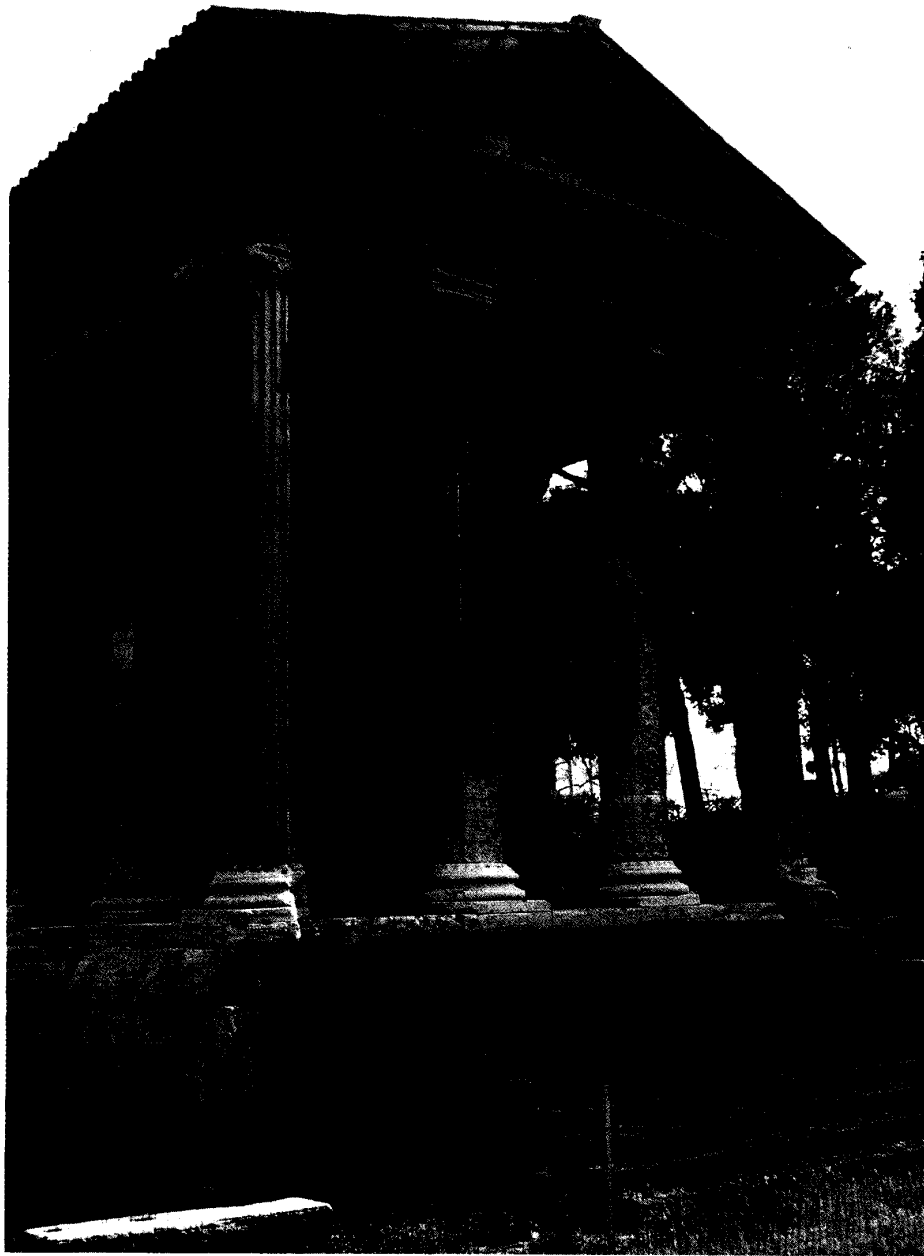


図1 Tempio della Fortuna Virile  
ローマにて迫和子による撮影



**S**ont tout le cuer leur arce fêche  
 Raison parle.  
**O**u ce dunt de l'autre fleuve  
 En quel maine on le veuve  
 Les fauces y sont en souffrees  
 Et enebuees mal sauouees  
 Et d'ome chennice fumant  
 Et oute de pueur efrumant  
 Et il ne couit mie doucement  
 Mais de font si li deusfont  
 Qui ne rempeste liur en son aus  
 Plus que nul ourille remeue  
 Sur ce fleuve q'je ne mence  
 Et ephours multe fois m'i bence  
 Et ne li receffort ses ondes  
 Qui m'ist p'nt l'andee et p'fades  
 Mais li dolereux dunt de lise  
 Et contre li luanille p'ise  
 Qui le conhamit par efrumant  
 Et oues ses ondes remouuant  
 Et li fait les fies et les plingies  
 Et aille en gueses demontaignes  
 Et li fait enteeus luanille  
 Et an d'ent le fleuve luanille  
 Et tant liome ala ruis demouuant  
 Et m'ist p'nt p'nt et plouent  
 Et m'ist en leus plies fin meime  
 Et neust se plingent en leus lames  
 Et ne se cessent l'efmaner  
 Et ul ne p'nt meigne ou p'nt nacer  
 Et tant p'nt en ce fleuve entre  
 Et on pas seulesm'et jusqu'au b'nt  
 Et m'ist p'nt tant en f'nt  
 Et tant se plingent en leus fies de li  
 Et a p'nt emp'nt et de b'nt  
 Et a l'endee fleuve de b'nt  
 Et tant en f'nt leus et a f'nt  
 Et tant f'nt hors de f'nt plonde  
 Et m'ist f'nt en ab f'nt

Et si tues par f'nt les f'nt  
 Qui ne f'nt de f'nt  
 Et par quel liur p'nt  
 Mais les f'nt f'nt  
 Et en jamais amont ne f'nt

**A** fleuve li tant remouuant  
 Et par tant de b'nt de f'nt  
 Et tout son b'nt de f'nt  
 Qui ul d'nt de f'nt de f'nt  
 Et li d'nt de f'nt  
 Par sa p'nt et par f'nt  
 Et li de f'nt de f'nt  
 Par leme de mule de f'nt  
 Et li f'nt de f'nt et de f'nt  
 Et tant de f'nt et tant de f'nt  
 Et of li de f'nt de f'nt  
 Par sa de f'nt de f'nt  
 Et a leme de f'nt de f'nt  
 Et tant de f'nt de f'nt  
 Et d'nt de f'nt de f'nt  
 Et on f'nt de f'nt de f'nt  
 Et a f'nt de f'nt de f'nt  
 Et a l'ad'nt de f'nt de f'nt



**E**t si haut ou chief de l'and'aigne  
 Ou pend'nt non pas en la plaigne  
 Menacez tous f'nt de f'nt  
 Par f'nt de f'nt de f'nt

図2 Cambridge, Fitzwilliam MS. 169, folio 32.  
 Roman de la Rose



図3 Oxford, Bodleian MS. Douce 371, folio 40.  
*Roman de la Rose*



図4 Valencia MS. 387, folio 42vo.  
*Roman de la Rose*

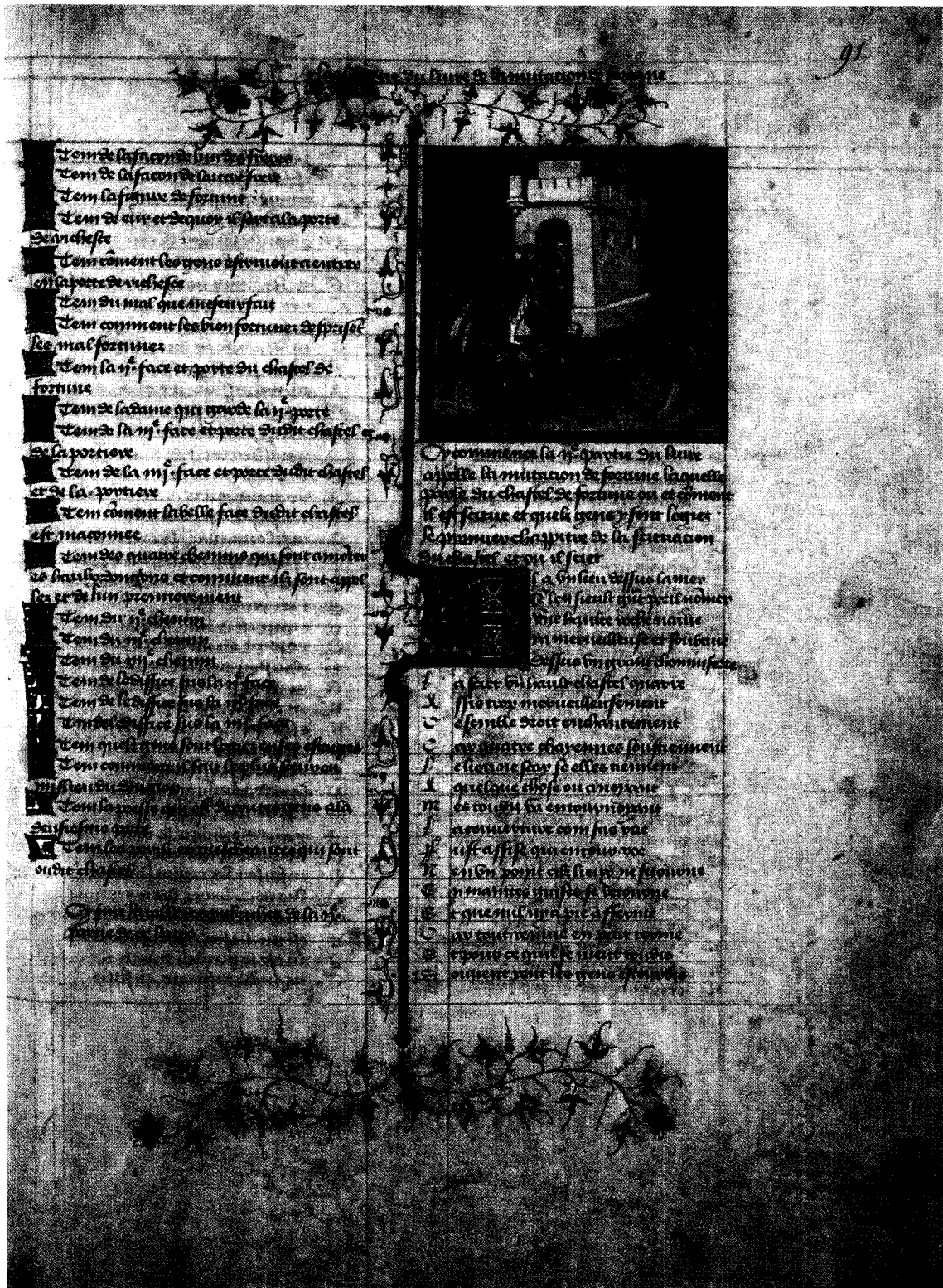


図5 Paris, Bibliothèque Nationale MS. Fr. 603, folio 91.  
Mutacion de Fortune

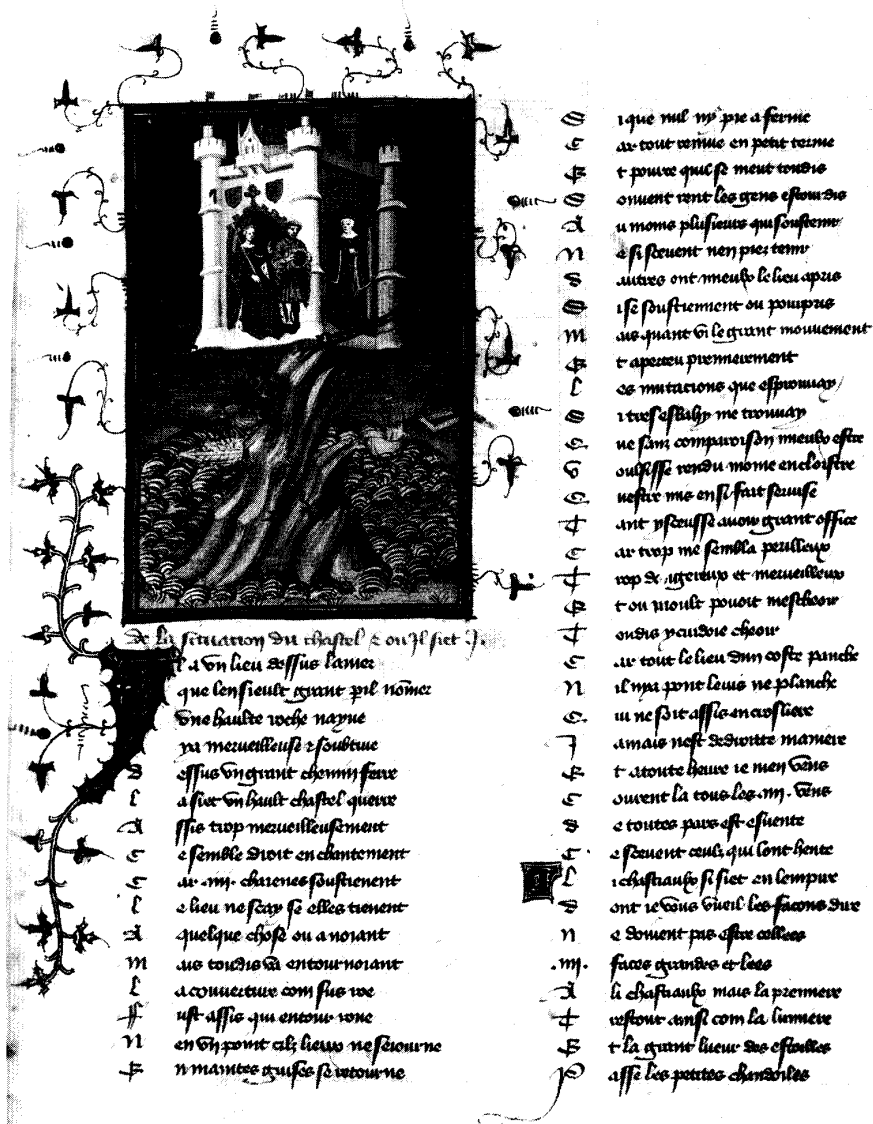


図6 München, Bayerische Staatsbibliothek  
 MS. Codex gallicus II, folio 13.  
*Mutacion de Fortune*

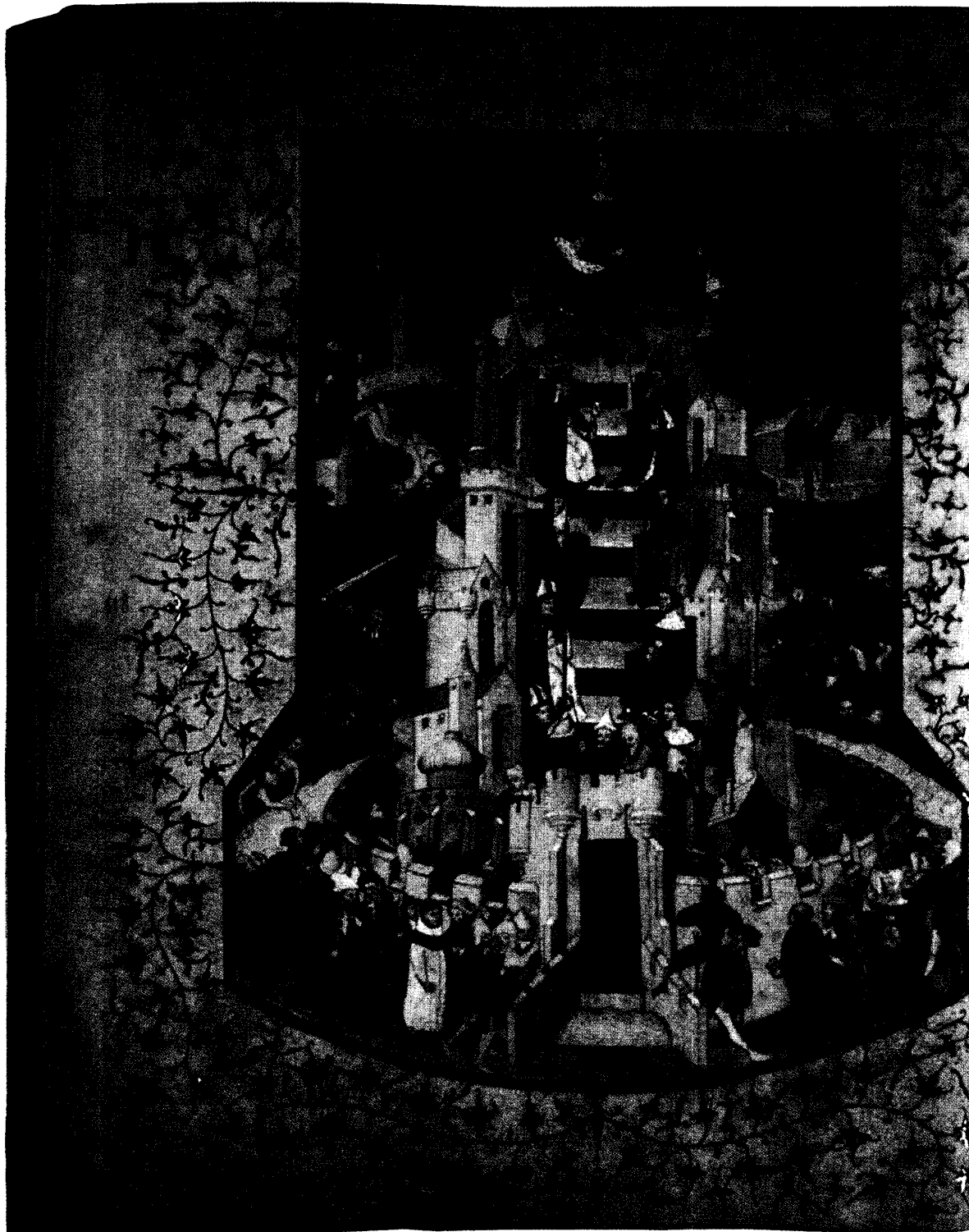


図7 Paris, Bibliothèque Nationale MS. Fr. 12559, folio 118vo.  
*Chevalier Errant*